

# 幼稚園を活性化する教育方針とその実践

鹿内 信善\* 坂口 幸美\*\*\* 安氏 洋子\*\*

Educational policy and practice for activating kindergarten education

Nobuyoshi SHIKANAI, Yukimi SAKAGUCHI and Yoko YASUJI

## 概要

参観して活気が感じられる幼稚園がある。そのような幼稚園の園長は、どのような教育方針をもっているのだろうか。そしてその教育方針をどのように実践化しているのだろうか。このふたつのことを明らかにする研究を行った。分析対象とした幼稚園は次のような特徴を持っていることが明らかになった。この幼稚園はグローバルな教育を重視している。そのため、英語教育を充実する取り組みをしている。園長は保護者との信頼関係を築くための試みを多く行っている。また教職員のキャリア形成をサポートすることにより、教師の使命感を高めている。これらの取り組みによって保護者と教職員の間の信頼感も醸成されている。また地域との連携にも力を入れている。その取り組みのいくつかは成果を上げ始めている。以上のことが、幼稚園教育の充実・活性化につながっている。

キーワード：幼稚園教育活性化 教育方針 実践エビデンス

## I. 目的

参観して活気が感じられる幼稚園がある。本研究では活気が感じられる幼稚園の教育方針と実践を分析していく。「活気がある」という判断は、観察者による主観的なものである。しかし、まず主観的な判断がなければ、「活気のある幼稚園」を選定できない。そこで本研究では、第1筆者が今年度参観した幼稚園の中で、最も「活気がある」と判断した幼稚園を1園、分析対象として選定した。ただし、主観的判断を補強するための客観的指標もとってある。それは分析対象となる園の定員充足率である。分析対象となった園の定員は155名、2014年度園児数は173名、2015年度は170名である。この園は預かり保育などは行っていない。にもかかわらず毎年、定員を超える園児を確保している。保護者・園児のニーズと提供される教育がマッチしていなければ定員充足ははかれない。そのため、この定員充足率の高さを「活気がある幼稚園である」という主観的判断を補強する指標にした。

この幼稚園はどのような教育方針を持っているのか、またどのような実践を行っているのかを分析する。それにより幼稚園教育を充実させていく手掛かりを得ていく。これが本研究の目的である。

## II. 方法

### 1. 分析対象園

福岡県内私立 A 幼稚園

### 2. 主な資料収集法

園長および保護者へのインタビュー（インタビューは第1筆者が行った・インタビューには第3筆者も同席した）。授業や活動のビデオ撮影（撮影は主として第3筆者が担当した）。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、幼稚園理事長及び園長の同意を得て行っている。また撮影については、園長より保護者へ説明し同意を得ている。本研究では園長へのインタビュー資料が大きなウェイトを占めている。箕浦（1999, p. 35）はインフォーマントに対する「クレジットをどのようにあらわすのかも考慮するべきである。」ことを指摘している。筆者らはこの指摘も重要な倫理的配慮事項であると考えた。そのため分析対象園の園長も本論文の共著者に加えクレジットの問題もクリアしている。

### 4. 採用したインタビュー法

主な資料収集はインタビュー法によった。筆者らは当初「半構造化インタビュー法」を予定していた。半構造化インタビューのために用意した質問項目は次の10項

\*福岡女学院大学

\*\*福岡女学院大学人間関係学部

\*\*\*春日小鳩幼稚園

目である。「本幼稚園の教育方針の特色」「教育方針・経営方針の策定に園長先生はどのように関わったか」「教育方針を教職員に対しどのようにして伝えているか、どのように共有化しているか」「本幼稚園における外国語活動の位置づけ」「外国語活動の教育体制」「美術教育の取り組み、とくに著名な芸術家との連携が以前あったことが現在の教育方針にどのように生かされているか」「算数・国語などの早期教育についてどのような見解を持っているか」「この園の音楽教育の課題」「地域との連携」「大学との連携に期待するもの」。

最初の質問項目から、インタビュー（園長）は、質問内容を越えた豊富な情報提供をしてくれた。このため、あらかじめ用意した質問項目の順序にはこだわらずにインタビューすることにした。ただし、第1筆者があらかじめ用意した項目に関連する発言があった場合は、その項目に関する発言を促すようにした。たとえば「教育方針」についての発言の中に「外国語活動」に対する言及があった場合は、「外国語活動の教育体制」に関する質問を挿入した。また、インタビュー時間が約1時間40分に及んだため、「この園の音楽教育の課題」「大学との連携に期待するもの」の2項目に関するインタビューは割愛した。

これらの変更に伴い、インタビュー資料の分析には「半構造化インタビュー法」ではなく「半標準化インタビュー法」の考え方を採用することにした。ただし本研究では、半標準化インタビュー法をそのまま適用することを意図していない。そこで、Flick,U.（邦訳 2002,pp.102-109）の解説に依拠して、本研究で参考にする「半標準化インタビュー法」の「考え方」を整理しておく。

- ①半標準化インタビュー法は、「インタビューが調査のトピックに関して複雑な『知識の貯え』を有しているということを前提」としている。（本研究のインタビューは、この前提を十分に満たしている。）
- ②インタビューの後でインタビューの「主観的理論を再構成する」。再構成は「インタビューの発言内容の構造を図式化すること」により行う。この手続きは「構造敷設」とよばれている。
- ③構造敷設は、インタビュアーがまず行う。次に、インタビューと一緒に再構成する手続きを取る。この手続きにより「コミュニケーションによる妥当化」が達成される。

以上の手順によって、園長に対するインタビューデータを分析していく。

### Ⅲ. 結果の分析

#### 1. インタビュー内容からの教育方針抽出 分析データの作成

インタビュー資料の文字数を減らすため文語体に改めた。適宜句点を入れ短文化した。冗長な発言を割愛し

た。その後、意味的にまとまりのある発言をブロック化した。ブロック化は、インタビューの発言順序を崩さずに行った。合計 23 個の発言ブロックにまとめた。この資料を「発言資料」とよんでおく。ここまでの作業は第3筆者が行った。

23 個の発言ブロックを KJ 法によって 5 つに分類し、まとまりごとに命名した。それをもとに構造敷設を行った。それが図 1 である。この作業は第1筆者が行った。

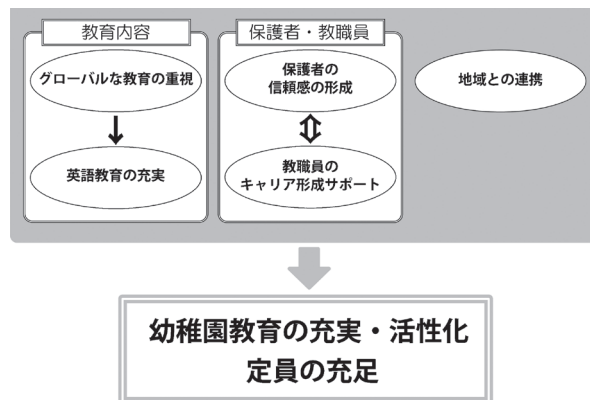


図 1

図 1 は次のことを意味している。

この幼稚園はグローバルな教育を重視している。そのため、英語教育を充実する取り組みをしている。園長は保護者との信頼関係を築くための試みを多く行っている。また教職員のキャリア形成をサポートすることにより、教師の使命感を高めている。これらの取り組みによって保護者と教職員間の信頼感も醸成されている。また地域との連携にも力を入れている。その取り組みのいくつかは成果を上げ始めている。以上のことが、幼稚園教育の充実・活性化につながっている。

#### コミュニケーションによる妥当化

図 1 を呈示しながら上掲の解説をまず第3筆者に行った。第3筆者からは、図 1 の構造は妥当なものである旨の回答を得た。そこでインタビューでもある第2筆者にも同様の解説と図示を行った。第2筆者からも妥当な構造であるという回答を得た。第2筆者には、あわせて図 1 の構造敷設に用いた「発言資料」への加筆修正も依頼した。第2筆者が加筆した資料を「改訂発言資料」とよんでおく。

以上の手続きによって発言資料及び構造敷設をコミュニケーションによって妥当化する作業を行った。

#### 2. 教育方針の実践化に関する検証

第1筆者が行った構造敷設は妥当なものである。このことが、インタビューである第2筆者及び共同研究者である第3筆者によって確認された。そこで次に、図 1 で構造化した教育方針が実際にどのように実践されているのかを諸資料によって検証していく。前述したように、園長発言は 23 個の発言ブロックに分けられた。しかし、

そのすべてを掲載することはできない。ここでは典型的な発言ブロックを14個選択し例示していく。また、例示する発言ブロックを構成する文の一部も割愛した。

教育方針が実践されていることを示すエビデンスとして次の4つの資料を用いた。①園長による事例報告。②保護者へのインタビュー。保護者インタビューは、英語劇発表時に参観に来た保護者からランダムに選んだ9名に行った。インタビューは第1筆者が行った。質問は次の1項目である。「この幼稚園にお子さんを入園させてよかったと思うことは何ですか？」③分析対象幼稚園で撮影した映像④分析対象幼稚園から提供された文書資料。

## 2-A. 「グローバルな教育の重視」に関する園長発言と実践エビデンス

以下にあげる園長発言は、全て園長の加筆修正を経た「改訂園長発言資料」である。

### 園長発言 A 1

「～ねばならない」で固定化してしまうのはよくない。海外の子を受け入れることで、異文化を学ぶことができる。たとえば、手で食べる文化の子どももいる。マナーを教えることも必要だが、グローバルに教えてほしい。「～でなければならない」という教え方はダメだと教職員には伝えている。文化背景の異なる子どもによっては、食べ方が異なる。最初からこうでなければならない、と教えるのではなく、まず子どもに食べるカトラリーを選ばせてみる。そして自分で選んで、結果これがいいと分かることが学習。この世に絶対はありえないのだから。文化の異なる国から来た子ども達を日本のやり方で縛ることは、その子たちの食文化の否定になる。

この教育方針が実践されていることを示すエビデンスとして次の事例をあげることができる。

以前ロシア系のオーストラリアの子を1ヶ月ほど預かった際、園の給食指導ではフルーツは最後と教えていたが、その子がフルーツから食べた。その際、日本の子どもたちから「No!」と強く否定され、初めての経験でパニックになり泣いてしまったことがあった。日本の子どもたちにも異なる国の文化の違いを話し、その子の国では先にフルーツを食べることもある、という話をしたところ、皆納得し、日本の子どもたちにも学びとなった。

### 園長発言 A 2

運動能力、絶対音感も含め、言語も絵画も、幼児期にできるだけ体験し、五感に刺激を与えて、脳のシナプスを繋げてあげたい。言葉が入ることにより認識できるものが見えてくる。それと同時に物理空

間だけの作業ではなく、言語空間を広げることにより、文字の情報だけで頭の中で状況を再現し、操作できイメージする力を身につけ、考えることのできる力を養いたい。

この教育方針が実践されていることのエビデンスは保護者インタビューから得られた。

保護者7「絵を全然描けなかったんですけど、なんかあの、ものとしてわかるような絵が描けるようになったのが。」

保護者9「あの、色んな分野について教えてもらえるっていう、英語も音楽も絵画もそうなんですけど。何かこう自由に遊ばせることも（数語不明）色々教えてもらってるっていう。上のお姉ちゃんと（数語不明）。そんな感じですね。」

（注：保護者番号はインタビューした順番である。以下同様。）

### 園長発言 A 3

子どもたちの言語空間も広げてあげたい。言語空間を広げることで、できるものを伸ばしてあげたい。将来なりたい自分になるために選択肢が広がると思う。

この教育方針は「英語教育の充実」につながるものである。そのため、この教育方針が実践されていることのエビデンスは、次節の「2-B. 英語教育の充実」に関するエビデンスを充てることができる。

## 2-B. 「英語教育の充実」に関する園長発言と実践エビデンス

### 園長発言 B 1

年長からの英語教育はクレイグ先生が27年間実施している。坂口園長に変わってから、年少クラスから英語を開始した。現在は園長が中心になって英語教育を行っている。

この教育方針が実践されていることのエビデンスも保護者インタビューから得られた。

保護者1「英語の勉強があったように、先生がああ、授業の中で自然と子どもに英語が身につくんじゃないかなって。遊びながらですね。というふうには思いますね。」

保護者3「英語ですね。好きなので。」

### 園長発言 B 2

外国語も楽しくないと覚ええない。年少で日本語を使用せず、英語のみでコミュニケーションを行って



も、40～50分くらいは実施できる。子どもは順応する力を持っている。動きを使って行う。

この教育方針が実践されていることを示すエビデンスとして次の事例をあげることができる。

たとえば、お手玉を用いて、動きと言葉を連動させることにより、言葉のコミュニケーションを視覚化している。ハローと言いながら投げのお手玉を受け取る子どもたち。次は子どもたちがハローと言いながら投げ返す。文字通り言葉のキャッチボールをしている。

### 園長発言 B 3

人の前に出てパフォーマンスをすることを大切にしている。7月10日（金）劇発表を実施。『うらしまたろう』と『三匹のやぎのがらがらどん』を英語で発表する。

実際に、パフォーマンスを大切にした英語劇発表が行われた。このエビデンスとして写真1をあげておく。また、発表終了後、ネイティブの講師がなぜこの題材を選んだかを丁寧に説明していた。たとえば、やぎが歩く様子を表すオノマトペを繰り返すことにより「R」の発音が自然に身につくこと、等である。



写真1

### 2-C.「保護者の信頼感形成」に関する園長発言と実践エビデンス

#### 園長発言 C 1

「小鳩っ子」（園長発行の月刊配布物で保護者へ教育観などを発信）の感想やコメント、保護者からのお手紙には、必ず園長が手書きの返事を書いている。クラスを持たない園長としては母親たちの様々な情報が入り、人間関係を築くことが出来るというメリットがある。このやり取りの中で園長と保護者との信頼関係も構築されていき、安心して子どもを

園に預けられるという図式が出来上がる。

この教育方針が実践されていることを示すエビデンスは写真2である。園長は、保護者からの感想・コメント・手紙等を大切にしている。すべて、写真2のようにファイルし、必ず手書きの返事も出している。

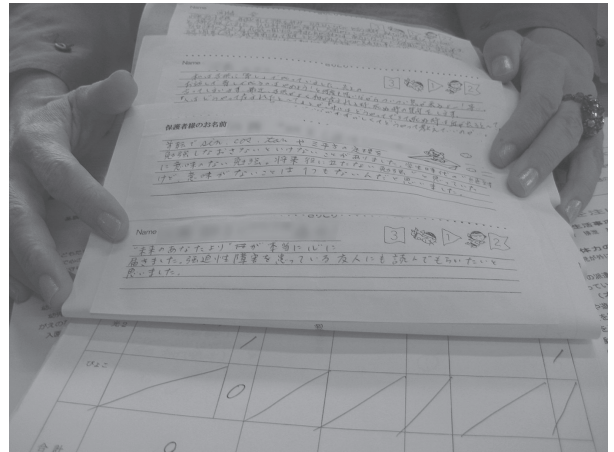


写真2

#### 園長発言 C 2

園長自身が園バスに乗り、子どもたちの送迎をすることもある。そうすることで、直接保護者ともかかわる機会が得られ、子どもの様子を説明することができる。特に海外から来た子の保護者はとても不安で子どものことを心配している。その保護者とも英語で直接やり取りを行っている。必要に応じて園長が家庭訪問も実施している。

この教育方針が実践されていることを示すエビデンスとして次の事例をあげることができる。

2015年度途中から、日本語も英語も話せない外国籍園児を受け入れた。この園児と保護者をサポートするため、園児が適応できるまで、園長は園バスに乗り送迎した。また、この園児の両親が同時に「おたふくかぜ」に罹患した時には、園長自ら園児宅に赴き家事・養育のサポートをしていた。

### 2-D.「教員のキャリア形成サポート」に関する園長発言と実践エビデンス

#### 園長発言 D 1

重要なのは、モンテッソーリとかピアジェとかいうような看板ではないと思う。母親たちは、先生たちがどれだけ密に保護者と連絡をとり、親身に子どものことを考え、関係を築いていっているのか、ということが分かった時に、そして信頼関係が築けた時に、自分の子どもをここで保育してもらいたいと思うのではないか。だから、職員が仕事全体を好き

でやっているかどうかということ大切にしている。

この教育方針が実践されていることのエビデンスも保護者インタビューから得られた。

保護者5「あー、何かもう園の雰囲気がすごくこう、園長先生はじめすごく明るくて、子どもたちが先生たちと一緒に楽しんでいるなあっていうのがすごく行事ごとでわかるので、その点では何かのびのびできてるのかなって思います。」

保護者5のこの発言は、前項の「保護者の信頼感形成」のエビデンスにもなるものである。

#### 園長発言 D 2

好きな言葉をメモして残していくようにしている。教職員に気づいてほしいことなど、ホワイトボードに今日の言葉として書いている。退職した教職員から、「ホワイトボードの言葉に救われた」という手紙や声を聞くこともある。言葉の栄養として、気づく職員は気づいている。この先生の為に今日は書いている、という日も多々ある。

この教育方針が実践されていることを示すエビデンスは写真3である。園長はホワイトボードの右側に、毎日「言葉の栄養」を書いている。

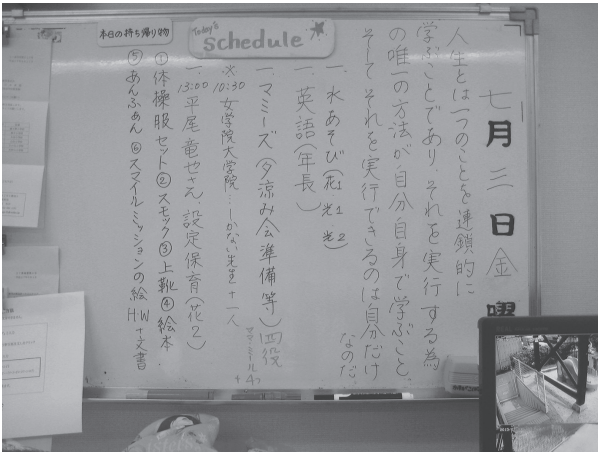


写真3



写真4

さらに、旧教職員から届いた手紙にあった、次の文章もエビデンスとなる。「園長先生が毎日朝礼で言ってくださること、ホワイトボードの言葉。一つ一つのおかげで私は自分を奮い立たせ頑張ることが出来ました。」

#### 2-E.「地域との連携」に関する園長発言と実践エビデンス

##### 園長発言 E 1

どこの地域の子どもであろうが、全ての垣根を取り払い、子どもたちの命を守らなければならないので、保育所・幼稚園・小学校合同での避難訓練を呼びかけた。避難ルートを決め、ぶつかり合うことのないよう速やかに小学校の運動場に避難できるように工夫している。園長(坂口)の呼びかけにより、この4年間は秋に地震時保幼小合同避難訓練が実現している。

この教育方針が実践されていることを示すエビデンスは写真4である。2015年度にも地震時保幼小合同避難訓練が行われた。

##### 園長発言 E 2

幼稚園、保育園のどちらの出身であっても、小学校では一緒になり、仲良くやっていかなければならない。同じ地域の子どもであるのならば、早くに交流していた方が小学校に上がってからが子どもの利益につながる。

この教育方針が実践されていることを示すエビデンスとして、次の事例をあげることができる。

園長(坂口)が自発的に保育園の運動会に出かけた。それをきっかけにして幼保の連絡体制ができた。また、避難訓練等の連携もできるようになっている。

### 園長発言 E 3

〇〇市はコミュニティスクールを謳っている。地域、家庭、学校の三者連携により子どもを育てていくということで、視察団も入っているにもかかわらず、幼稚園はいつも入れてもらえていない。

### 園長発言 E 4

保幼小連絡会についても、両隣の小学校から参観のお知らせなどが来ない。遠方の小学校からは連絡会の日程案内や参観、交流会などの案内がくるため、要録を記録し訪問している。幼稚園の先生方が小学校授業の参観に訪れると、幼稚園卒園児はとても喜ぶ。交流会などの情報交換を行う。特に発達支援が必要な子どもなどは、もっとみたいと思うが、なかなかできない。小学校の先生方にも、小学校就学前にどのようなことができるようになっていくのか、幼稚園に自由に見に来ていただきたいが、まだ実現していない。

園長発言 E 3 および E 4 は、いずれも現在検討中の教育方針である。このため直接的な実践エビデンスをあげることはできない。しかし、地域連携や保幼小連携に対する園長の思いは保護者にはよく伝わっている。保護者 4 はインタビューに対して次のように回答している。

保護者 4 「そうですね、もう先生方がですね、すごく教育熱心で、園児ひとりひとりのことをちゃんとこう見て頂いて、はい。これからまた色々学校とかと提携して教育をどうするか考えられているってことなので、またこれからの幼稚園にちょっと期待したいですね。」  
このように、園長が示している、地域や保育園・小学校との連携プランは、保護者の幼稚園に対する期待の源泉になっている。

## IV. 考察と今後の課題

分析対象園園長の教育方針は図 1 のように構造化された。構造化できるほどに明瞭な園長の教育方針とその着

実な実践は、幼稚園教育の活性化につながっている。同時に、保護者の支持も得ており幼稚園経営の安定化にもつながっている。図 1 に示した教育方針の構造は少子化時代における幼稚園経営の一つのモデルとなりうる。

以上のような研究成果も生まれたが、今後検討すべき課題も残った。本研究では、インタビュー法を主な研究方法としていた。本研究で用いた方法だけではエビデンスを明示することができない活性化要因も見られた。ひとつは、「のびのびした教育」である。たとえばふたりの保護者が、インタビューに対して次のように回答していた。

保護者 2 「のびのびしてるっていうか、まあ何にでもやってみよう、がんばってみようって。」

保護者 8 「あのなんか、のびのび、のびのびしてるどころがですね。はい。」

分析対象園の「のびのびした教育」を記述する方法を本研究は用意していなかった。その方法を開発していくことが課題として残された。

ふたつ目は「人を惹きつける園長の個性」である。上掲の退職教職員の手紙には次のような文言も書かれていた。「園長先生の誰でも呼びつける程の素敵なオーラ、人格に私はいつも惹かれていました。」このような園長の人間的な魅力が幼稚園教育を活性化する大きな要因になっている。このことは、第 1 筆者および第 3 筆者が共通に認識していることである。しかし、「園長の人間的な魅力」を記述することは、本研究で用いた研究方法のみでは困難であった。今後、エピソード法・逸話記録法等も用いて、幼稚園教育を活性化させる「園長の人間的な魅力」についても明らかにしていきたい。

さらに幼稚園の活性化と幼稚園教育の質の保障のかかわりについても検討していく必要がある。本研究を、このような大きな問題を考えていく手掛かりにしていきたい。

## 文献

- Flick, U. 1995 (小田博志他訳 2002) 『質的研究入門— (人間の科学) のための方法論』 春秋社  
箕浦康子 1999 「フィールドワークの基礎的スキル」 箕浦康子 (編) 『フィールドワークの技法と実際』 ミネルヴァ書房, pp. 21-55